小学生対象の地域スポーツにおける指導者ハラスメント体験

大橋　恵・藤後　悦子・井梅　由美子

Coaching Harassment Experience Faced by Children in Community-Based Junior Sports Clubs in Japan.

Megumi M. Ohashi, Etsuko Togo, & Yumiko Iume

要　旨

Coaching harassment, which includes physical violence (corporal punishment) and psychological violence and other inappropriate coaching behaviors such as unfair treatment and favoritism, is known to occur in children's sports clubs. However, there are very few previous studies conducted on young children under the age of twelve. This study used the coaching harassment scale, which has nine items assessing concrete behaviors, to evaluate the coaching harassment experiences of children. A survey was conducted with sixth and seventh grade students, centered around their sports experiences in community-based junior sports clubs when they were elementary school pupils. The scale's internal consistency, test-retest reliability, and concurrent validity were confirmed. Results showed that some of them experienced coaching harassment and their experience was unrelated with quitting playing sports. Further, the more the students experienced harassment, the more their coach was rated as aggressive, and the less satisfaction they felt after playing sports.

キーワード：corporal punishment, pupil, aggressive behavior, coach（体罰、児童、攻撃行動、指導者）

1. 問題と目的

スポーツをおこなうことはただ楽しいだけではなく、スポーツ集団に参加して切磋琢磨することにより、身体面だけではなく精神面でも成長することができるという良い面が現代の子どもたちにとってはあるだろう。しかしながら、競争や修練という厳しい面も含まれるため、指導者によるハラスメントが問題となっている[1) 2) 3)]。スポーツ団体における体罰の多くは高校生以上で指摘されているが、より幼い者に対してもまた体罰やそれに類する行為が見られる[4)]。

指導者の態度や価値観はチームの子どもたちや周りの親たちなどの態度や価値観に大きく影響するため、指導者によるハラスメントが再生産される確率が高いことが指摘されている[5) 6) 7)]。そのため、その実態を把握することが極めて重要であると考えられる。

しかしながら、先行研究では中学生以上を扱うものが多く、小学生以下については実態があまりよくわかっていない。本邦において小学生以下がスポーツを行う場は、学校ではなく、主として地域スポーツや習い事の場である。中学生以上のスポーツ活動は学校部活動を中心に行われているため、教育の専門家である教員が指導に関わっていることがほとんどである。一方、小学生が参加する課

外スポーツは保護者や地域の人たちによるボランティア運営のものも多く、その指導者は教育の専門家ではない場合も多い[8]。そのため、自分の経験をもとに指導を行うものの、指導法や子どもへの声のかけ方などについて悩みを持っていることが調査で示されている[9]。子どものためと熱意をもって教えているが、それが客観的にみるとハラスメントにあたることもある。そのような構造の違いもあるため、本稿では小学校時代の課外スポーツにおける指導者によるハラスメントを扱うこととした。

体罰よりも広い概念である「指導者ハラスメント」は、「身体的暴力に加え、指導者による問題行動として頻繁に挙げられる「不適切な指導」、具体的には、人格を否定するような暴言、大声や威圧的な態度を使った高圧的な指導、不必要な身体接触、無視、いやがらせなどの児童・生徒を深く傷つける行為」[10] であると定義される。本研究は、大橋他[10] が作成したシンプルな 9 項目から成る指導者ハラスメント体験尺度を用いて、小学校時代のスポーツ活動において指導者からのハラスメントを受けた体験をとらえることを試みる。当該尺度は高校時代のスポーツ経験に関して妥当性が検討されているが、指導のやり方や頻度が異なる、より幼い小学校時代の経験についても適用可能かを検討する。具体的には、小学校 6 年生と中学 1 年生を対象に、小学校時代の課外スポーツ参加時の指導者ハラスメント体験やそのスポーツ活動の継続などについて質問紙を用いて尋ねた。

ハラスメント行動は攻撃性と関連が深いため[10]、ハラスメントを行う指導者は攻撃的な性格であると認知されるだろう。また、指導者ハラスメントは否定的な体験であるから、被害を受けた者のスポーツ参加に対する満足度は当然低くなるだろう。さらに冨江[11] において、類似概念である体罰が勝利至上主義的価値観と関連があるとされていたため、指導者ハラスメント経験とも関連があると考え、これも検討した。一方、指導者ハラスメントを受けた経験は全体的な自己有能観とは関連が薄いと考えられる（弁別的妥当性）。

本研究ではこれに加え、指導者ハラスメント体験と、スポーツ活動の継続（意図）の関係についても探索的に検討することとした。指導者ハラスメントはネガティブな経験であり、そのスポーツ活動の継続を低めることが予測される反面、競技レベルが高いチームほど勝利を追求するあまりハラスメントが起こりやすいこともまた示されている[5) 12)]。中学校では学校での部活動が始まるため、プレーする競技を変えやすい時期でもある。そこで、スポーツ活動の継続との関連に関して探索的に検討することとした。

2. 方法

2.1 調査時期

小学校 6 年生を対象にした調査を 2017 年 10 月中旬および 12 月上旬に実施した（現役データ）。つぎに、中学 1 年生を対象にした調査を 2018 年 11 月下旬に実施した（回想データ）。

二種類のサンプルを用いたのは、小学 6 年生は記憶が鮮明ではあるがいまだ渦中にあるためふり返ることが困難である可能性、一方、中学生に小学校時代の課外スポーツ活動を回想してもらう形では十分に振り返ることができるものの中学校での新しい経験が影響する可能性を考え、両方のサンプルを用いることとした。

2.2 手続き

現役データ・回想データともに教室で一斉に収集した。回想データは完全に匿名であったが、現役データは事前事後の対応を分析するため、クラスと番号を記載させた。

本研究は著者らの所属大学の研究倫理委員会の承認を得て実施された。実施にあたり、回答者には成績に関係しないこと、自由意思での参加をお願いしたいことを伝えた。また、調査実施前に学校長に十分に説明を行い、担任教員および保護者に説明プリントを配布して同意を求めた。

2.3 回答者

都内の公立小学校2校の小学6年生204名（現役データ）および公立中学校4校の中学1年生499名（回想データ：小学生とは別の区）が調査に回答した。

現役データの分析対象者は、回答漏れのあった5名、スポーツの習い事経験がない24名、2回目の調査（再テスト信頼性のために2回調査を実施）に不備があった39名（回答が回収できなかった者、一回目とは別の種目について回答していた者を含む）は分析から除外したため、136名（男子77名、女子59名）であった。回想データの分析対象者は、回答漏れがあった18名およびスポーツの習い事経験がない133名を分析から除外したため、348名（男子206名、女子142名）であった。

2.4 質問項目

調査用紙は表紙を含めて4頁で構成されていた。まず、習い事として経験したことがあるスポーツ種目をすべて選択させた後、その中から主なものを一つ選び、以下の質問を行った。なお、「指導者」という語は子どもたちには馴染みがないと考え、「あなたのコーチ（監督、先生）」という表現を用いた。

(1) スポーツ種目　小学生の課外スポーツとしてよく挙げられる、「サッカー、野球、バレーボール、バスケットボール、バレエ・ダンス、テニス、水泳、武道（剣道、柔道など）、陸上」を選択肢として設定し、さらに「その他」を作り必要に応じて自由記述を求めた。

(2) 経験年数　開始時と終了時の学年の回答を求めた。小学校入学以前に始めた場合は1（小学校1年生で開始）とカウントした。

(3) チームの競技レベル　チームの競技レベルを、「所属していたチーム（あれば）の競技レベルはどのくらいでしたか」と尋ね、「全国大会出場レベル（6）」「関東大会出場レベル」「都大会出場レベル」「地区大会上位レベル」「地区大会中位レベル」「それ以下（1）」「チームには所属しなかった・わからない（欠損値として扱った）」から回答を求めた。

(4) 指導者ハラスメント体験尺度　大橋他のもの[10]を用いた。これはTable 1に挙げた9項目について、自分がもっともよく指導を受けた指導者からの経験頻度を尋ねるものであり、「毎回のようにあった（6）」「週に1、2回あった（5）」「月に1、2回あった（4）」「4、5回あった（3）」「1、2回あった（2）」「一度もない（1）」から回答を求めた。なお、現役データのみ、再テスト信頼性検討のために指導者ハラスメント体験および種目を約1か月半の期間をおき2回測定した。

(5) 指導者の性格認知　収束的妥当性検討のために、回答者から見た指導者の性格について尋ねた。先述したようにハラスメントは攻撃行動と類似の部分が強いため、攻撃行動と関係が深いと考えられる性格特性語を選んで使用した。具体的には、「おだやかな性格（逆転項目）」「攻撃的な性格」「思いやりのある性格（逆転項目）」「きびしい性格」の4項目について、自分がもっともよく指導を受けた指導者に当てはまる程度について「非常にあてはまる（6）」から「全くあてはまらない（1）」までの6件法で回答を求めた。

(6) 指導者の勝利至上主義の程度認知　収束的妥当性検討のために、その指導者の持つ勝利至上主義的価値観の強さに関して、井梅他が行った保護者対象の調査[13]にてチーム風土を測定するために使用された項目の表現を小学生にわかりやすいように一部改変して用いた。具体的には以下の5項目「コーチは努力している子をほめていた」「コーチは、試合の勝敗ではなく、いかにプレーをしたかを大切にしていた（逆転項目）」「コーチは、ミスした選手を試合・選抜メンバーから外していた」「コーチは上手な選手ほどかわいがっていた」「コーチは勝つことをもっとも大切にしていた」が当てはまる程度について、(5) と同じ6件法で回答を求めた。内的整合性はあまり高くはないが、すべて使用した方がα係数は高かった（現役データα=.64、回想データα=.67）。

(7) スポーツ経験への満足度　収束的妥当性検

討のために、そのスポーツを行っていたことについての満足度を測定した。まず、やっていた当時の気持ちを思い出しての回答を求め、つぎに、当時を振り返っての現在の気持ちについて回答を求めた。

当時の満足度（現役データ α =86、回想データ α =.81）の項目は、「そのスポーツをやっていると楽しかった」「よく練習を休みたいと感じていた（逆転項目）」「練習や試合のことを考えると、ゆううつになっていた（逆転項目）」「練習や試合に行くのを楽しみにしていた」であった。現在の満足度（現役データ α =82、回想データ α =.76）の項目は、「そのスポーツをやると、今でも楽しい」「小学校時代にそのスポーツをやったことに満足している」「もしそのスポーツを始めたころに時間がもどったら、そのスポーツは選ばない（逆転項目）」「小学校時代にそのスポーツをやったことは時間のむだだったと感じる（逆転項目）」であった。それぞれについて、「はい（6）」「やや、はい（5）」「どちらかといえば、はい（4）」「どちらかといえば、いいえ（3）」「やや、いいえ（2）」「いいえ（1）」の 6 件法で回答を求めた。

(8) 自己有能観　弁別的妥当性検討のために、桜井[14]の認知されたコンピテンス尺度日本語版を用いて測定した。当該尺度は 4 つの下位尺度から成るが、今回は全体的な有能観である一般的コンピテンスとスポーツに関する有能観である運動コンピテンスのみを使用した。それぞれ得点が高いほどコンピテンスが高いことを意味する。

(9) スポーツ活動の継続（意図）　現役データについては、「あなたはそのスポーツを中学生になってもやる予定ですか（授業以外で）？」と尋ねた。回想データについては、「あなたはそのスポーツを中学生になってもやっていますか（授業以外で）？」と尋ねた。選択肢は「やる（0）」「やらない（1）」の 2 件法であった。

3. 結果

3.1　スポーツの種類など

回答者は、小学校時代に学校以外で取り組んだもっとも思い入れのあるスポーツを一つ選び、指導者との関係や当時の気持ちなどを回答した。まず、その際に選ばれた種目について述べる。

現役データでは、男子においても（69.3%）女子においても（65.9%）チームスポーツが多く、チームスポーツが選ばれた率に性差は認められなかった（$\chi^2_{(1)}$ =0.22, V=.04, *n.s.*）。一方、回想データでは、男子においてはチームスポーツが多いが（64.1%）、女子ではわずかに個人スポーツの方が多く（53.3%）、このスポーツの種類と性別の連関は有意であった（$\chi^2_{(1)}$ =10.10, V=.19, p <.001）。

具体的な種目名としては、両データセットに共通して、チームスポーツでは、男子ではサッカーと野球、女子ではバレエ・ダンスとバスケットボールが多かった。個人スポーツは男女共に水泳が圧倒的に多く、他にテニスと陸上が数名ずつに挙げられていた。

3.2　指導者ハラスメント体験得点の算出

各項目について「一度もない」と回答した者を経験無、それ以外と回答した者を経験有とした集計を Table 1 にまとめた。これをみると、指導者ハラスメント体験を測定する 9 項目について一度も経験がないと答えた者の割合が 74～98％と過半数であることがわかる。選択肢を細かく見た場合でも、全体的に頻度が少ない回答が多い形で分布が歪んでいた。

項目間の順位相関係数の平均はあまり高くはないが（回想データで .34、現役データで .35）、信頼性係数は十分に高かった（α = .80, .82）。9 項目の単純合計として算出したハラスメント体験得点の平均値は、回想データで 10.33、中央値は 9.00、標準偏差は 3.40 であった。現役データでは平均値は 11.88、中央値は 9.00、標準偏差は 5.94 であり、事前事後得点には正の有意な相関が見られた（順位

Table 1　小学校時代の指導者ハラスメント経験者数：尺度の各項目ごとに

	現役データ				回想データ			
項目	経験有	(%)	無	(%)	経験有	(%)	無	(%)
失敗するとコーチから、ためいきや舌打ちをされたことがある。	34	(25.8)	98	(74.2)	45	(13.1)	298	(86.9)
コーチから、「ばか」「センスがない」など、人格や能力を否定するような言葉で怒られた。	22	(16.7)	110	(83.3)	45	(13.1)	298	(86.9)
コーチから無視された。	13	(9.6)	122	(90.4)	24	(7.0)	318	(93.0)
自分だけ試合に使われなかった時期があった。	17	(12.9)	115	(87.1)	30	(9.0)	305	(91.0)
コーチに必要以上にどなられた。	22	(16.2)	114	(83.8)	35	(10.2)	308	(89.8)
コーチは、試合中こうふんして、自分たちに物などを投げつけた。	2	(1.5)	132	(98.5)	8	(2.4)	332	(97.6)
コーチは、こうふんすると自分たちに手を挙げた。	5	(3.8)	127	(96.2)	10	(2.9)	331	(97.1)
コーチは、指導と言いながら、自分たちにひどい言葉をあびせた。	9	(6.8)	123	(93.2)	18	(5.3)	323	(94.7)
コーチは、特定の子どもをかわいがって（ひいきして）いた。	25	(18.9)	107	(81.1)	37	(10.8)	305	(89.2)

注）欠損値があるため一部合計値が 136 名（現役）348 名（回想）にならない

相関係数 r=.71, p<.001)。得点の分布に歪みが大きいため、以降の分析においては正規分布を前提としない分析（順位相関、ロジスティック回帰分析など）を用いることとした。

3.3　尺度の妥当性の検討

指導者ハラスメントが多い指導者は、攻撃的で、厳しく、おだやかさと思いやりに欠ける性格であり、勝利至上主義的な価値観を持つと認知されていた（Table 2)。また、指導者ハラスメント体験とスポーツ経験への満足度の間には有意な負の相関

Table 2　指導者ハラスメント体験尺度得点と関連変数との順位相関係数

	現役データ			回想データ		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
勝利至上主義的価値観	.51 **	.52 **	.48 **	.45 **	.39 **	.53 **
指導者性格　おだやか	-.40 **	-.41 **	-.37 **	-.30 **	-.28 **	-.31 **
指導者性格　攻撃的	.36 **	.32 **	.41 **	.37 **	.27 **	.44 **
指導者性格　思いやりがある	-.17 *	-.12	-.26 *	-.28 **	-.30 **	-.24 **
指導者性格　厳しい	.34 **	.29 *	.40 **	.31 **	.27 **	.29 **
満足度（当時）	-.13	-.03	-.31 *	-.19 **	-.20 **	-.20 *
満足度（現在）	-.10	.03	-.34 **	-.11 *	-.11	-.13
一般的コンピテンス	-.04	-.01	-.15	-.03	-.07	-.04
運動コンピテンス	.12	.17	.01	.05	-.02	.00

注）** p < .01 * p < .05

が見られ、特に女子において強かった。また、一般的コンピテンス・運動コンピテンスは指導者ハラスメントとは関連が認められなかった。なお、回想データにおいて、指導者ハラスメント体験得点は、練習日数（$r(330)=.31, p<.01$）およびチームの競技レベル（$r(179)=.18, p<.01$）と弱い正の相関関係が見られた。

3.4 性別・スポーツの種類による違い

性別とスポーツの種類（チームまたは個人）およびこの2つの交互作用効果を予測変数とし、指導者ハラスメント体験得点を被予測変数とする、ロバスト回帰分析を各データセットについて行ったところ、モデルは有意であった（現役データ $F(3, 119)= 6.08, p<.001, R^2=.04$；回想データ $F(3, 330)= 6.44, p<.001, R^2=.05$）。

現役データでは、スポーツの種類の主効果（$\beta=0.17, p<.01$）は有意でありチームスポーツでより得点が高いことが示されたが、性別の主効果（$\beta=-0.10$, *n.s.*）、交互作用効果（$\beta=-0.11$, *n.s.*）は有意ではなかった。回想データでは、性別とスポーツの種類の交互作用効果は有意ではなく（$\beta=-0.05$, *n.s.*）、性別の主効果（$\beta=-0.09, p<.01$）は有意、スポーツの種類の主効果（$\beta=0.06, p<.10$）は有意ではなかった。男性において女性よりも得点が有意に高かった。

3.5 競技継続との関係

継続意図を被予測変数とし，指導者ハラスメント体験得点，練習日数やチームの競技レベルなどを説明変数としたロジスティック回帰分析を行った（Table 3）。継続意図は有りが0、無しが1とコード化していたため、この結果は、競技レベルの高いチームに入っているほど続けていることを示す。男女別に見ると、男子では運動コンピテンスが高いほど、女子ではチームスポーツである場合とチームの競技レベルが高いほど有意に継続を選んでいた。指導者ハラスメント得点は継続に影響を与えていないことが示された。

Table 3 継続に関するロジスティック回帰分析

変数名	全体	男子	女子
性別	.30		
スポーツの種類	-.89+	-.68	-2.48 *
性別 * スポーツの種類	-.05		
一般的コンピテンス	-.14	.00	-.59
運動コンピテンス	-.24	-.53*	.40
チームの競技レベル	-.28+	-.12	-.92 *
練習日数	-.18	-.24	-.03
指導者ハラスメント得点	-.04	-.07	.15
R^2	.12**	.12*	.24 *
正答率	72.2%	74.3%	76.2%

** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$

なお、回想データでの継続率は男子では64.6%、女子では45.1%であり、この割合の差は有意であった（$\chi^2_{(1)}=13.00, V=.19, p<.001$）。スポーツの種類ごとに行うと、チームスポーツ経験者においては有意な性差は見られず（$\chi^2_{(1)}=0.98, V=.07$, *n.s.*）、個人スポーツ経験者でのみ性差は有意であった（$\chi^2_{(1)}=4.38, V=.17, p<.05$）。

4. 考察

本研究の第一の目的は、スポーツの最初の入り口となりうる小学校時代において、課外スポーツにおける指導者からのハラスメントの実態をつかむことであった。さらに、第二の目的をスポーツにおける指導者によるハラスメントを簡便かつ適切に測定できる尺度の妥当性を確認することとしていた。

その結果、両サンプルにおいて小学校時代の身体的な指導者ハラスメント体験は3%弱であるので、現状においては稀な状況ではあるが、皆無ではないことは留意すべきであろう。一方、ため息や舌打ちの経験率は現役データでは25.8%であるが、回想データでは13.1%と半減している。ひいきや怒声などの精神的なハラスメントの経験率は、全体的に回想データの方が低い。これをどのようにとらえたらよいだろうか。対象者による誤差であるとも考えられるが、精神的な被害は記憶に残りにくい

可能性もあろう。しかしながら、不快な記憶の方が快い記憶よりも不随意に思い出しやすく[15]、過去の傷つきを意図せず再体験してしまうことがあり得るので注意は必要である。

また、指導者ハラスメント体験尺度は、指導者の性格認知、満足感などと予測通りの関係が見られたこと、内的整合性と再テスト信頼性があること、チームスポーツで高いなど先行研究と一致したパターンを見せたことから、小学生対象のスポーツに関しても一定の妥当性があることが確認できた。しかしながら、今回の標本はハラスメント体験がない者の割合が高いということに注意が必要である。また、指導者の持つ勝利至上主義的な価値観との相関は高かったが、あくまでも児童が持つ認知であり指導者本人の認識と同じとは限らない点も考慮する必要があるだろう。

また、本研究には、いくつか未検討な事柄が残る。まず、スポーツを行っていた時期と調査時期の関係である。本研究はボランティア指導者も多く関わっている小学生対象のスポーツを取り上げた。小学校時代にもっとも関わりの深かったスポーツを終えた学年（卒業後も続けている場合も6として計算）を尋ねたところ、現役データでの平均値は5.36（*SD*=1.05）、回想データでの平均値は5.49（*SD*=1.02）であった（中央値は共に6.00）。つまり、小学校高学年時代の課外スポーツ活動について尋ねたかったのだが、小学校6年生になる前にすでに辞めているケースが35.3％（現役データ）、24.8％（回想データ）に上った。ハラスメント経験に限ったことではないが、記憶は時間が経つと新しく様々な出来事が起こるため不正確になってしまう可能性があるため、記憶の新しいうちに調査を行うことが望ましい。

つぎに、本研究のデータはあくまで東京都内の二つの区の子どもたちを対象としている。ジュニアスポーツの在り方には地域差があり、体験について分析するには偏っていた可能性がある。

さらに、継続意図に関しては様々な変数を投入した回帰分析から、男子では運動コンピテンスの高さ、女子ではチームスポーツであることとチームの競技レベルのみが効果を示し、これらの要因を考慮すると指導者ハラスメント体験は継続に影響を与えていなかった。嫌な体験によりそのスポーツから離れようとする現象と、熱心なチームであるからこそ指導者ハラスメントが多く、同時に技術が高くなるために進学後も継続するという現象が相殺しあった結果ではないかと考えられる。指導者ハラスメント体験がその後のスポーツ活動やその他の対人関係などにどのように影響するかについては、もっと総合的に検討する必要があるだろう。

以上、本研究では、小学生の課外スポーツにおける指導者ハラスメントの実態を明らかにすることを試みた。子どもたちの指導者ハラスメント体験は、身体的ハラスメント3.8％から精神的ハラスメント25.8％と幅広いものとなった。ハラスメントは頻度や程度が低くても子どもの心身に与える影響は大きく、直接的な被害のみではなく、指導者ハラスメントを見聞きしたという間接的な被害も忘れてはならない。厚生労働省は2020年2月に「体罰等によらない子育てのために[16]」という体罰防止のガイドラインを公開しており、程度に関わらずすべての体罰が禁止されている。指導者は、この点に留意して指導に臨むことが求められる。また本研究において、指導者ハラスメントと勝利至上主義的価値観が関連していることが示されていることから、勝利至上主義から生涯スポーツへの価値観の変換や、小学生では全国大会を実施しないなど、勝利至上主義を助長しないような大会運営の試みも必要となることを提唱したい。

5. 引用文献

1）阿江美恵子（2022）. スポーツ心理学からみた体罰の防止と指導者・競技者育成　福村出版 .

2）佐々木万丈（2015）. 女子高校生スポーツ競技者への指導者による体罰の実態 スポーツとジェンダー研究 , **13**, 6-23.

3）Stirling, A.E.（2013）. Understanding the use of emotionally abusive coaching practices. *International Journal of Sports Science & Coaching*, **8**, 625-639.

4）朝日新聞（2017）. 小学生 減らない指導者暴力 2017.3.24. 日刊 , 24.
5）阿江美恵子（2000）. 運動部指導者の暴力的行動の影響：社会的影響過程の視点から 体育学研究 , **45**, 89-103.
6）Horn, T. S.（2008）. Coaching Effectiveness in the Sports Domain. T.S. Horn（Ed.）, *Advances in Sport Psychology,* Campaign, IL: Human Kinetics（pp. 239-267）.
7）内田 遼介・寺口 司・大工 泰裕（2020）. 運動部活動場面での被体罰経験が体罰への容認的態度に及ぼす影響 心理学研究 , **91**, 1-11.
8）大橋 恵・井梅由美子・藤後悦子・川田裕次郎（2017）. 地域におけるスポーツのコーチの喜びと困惑―コーチ対象の調査の内容分析 コミュニティ心理学研究 , **20**, 226-242.
9）大橋 恵・藤後悦子・井梅由美子・川田裕次郎（2016）. 地域スポーツの指導者が直面している課題：指導者の指導力向上に向けて スポーツ産業学研究 , **26**, 243-254.
10）大橋 恵・井梅由美子・藤後悦子（2022）. ジュニアスポーツにおける指導者ハラスメント体験尺度の探索的検討 心理学研究 , **93**. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpsy/advpub/0/advpub_93.20224/_article/-char/ja/
11）冨江 英俊（2008）. 中学校・高等学校の運動部活動における体罰 埼玉学園大学紀要人間学部篇 , **8**, 221-227.
12）藤後悦子・大橋恵・井梅由美子（2018）. 中学校の運動部指導者の関わりが部内の人間関係および生徒の精神的状態に与える影響 社会と調査 , **20**, 50-66.
13）井梅由美子・大橋 恵・藤後悦子（2022）. 地域スポーツに参加する母子のチーム参加満足度に与える要因の検討：チームの強さ・風土・スポーツの種類等に着目して こども環境学研究, **17**, 71-77.
14）桜井茂男（1993）. 認知されたコンピテンス測定尺度の作成 教育心理学研究 , **31**, 245-249.
15）神谷俊次（2003）. 不随意記憶の機能に関する考察：想起状況の分析を通じて 心理学研究 , **74**, 444-451.
16）厚生労働省（2020）. 体罰等によらない子育てのために Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/content/000598146.pdf（最終アクセス 2022.2.8.）

注

1 チームの競技レベルについてはわからない・チーム活動なしという回答も多く、分析対象人数が少なくなっている。現役データはチームの競技レベルについての回答率が低かったため報告しなかった。

謝 辞

本研究は、東京未来大学特別研究助成を受けて実施された。研究にご協力いただいた回答者の皆さんと、長谷川先生（東京未来大学）に感謝する。また、本研究の一部は、アジア社会心理学会・日本心理学会・日本教育心理学会で発表された。

（おおはし　めぐみ）東京未来大学
（とうご　えつこ）東京未来大学
（いうめ　ゆみこ）東京未来大学